（概要書）

「院外青年」運動の研究

――日露戦後～第一次大戦期における若者と政治との関係史

伊東　久智

若者の歴史とは、大人の歴史の未成品ではなく、それとは別個の輪郭を備えたもう一つの歴史である――。本論文はそうした問題意識に立脚して、日本近代における若者の歴史を、特に政治とのかかわりにおいて構想しようとしたものである。より具体的には、日露戦後から第一次大戦期にかけて、中央議院外において展開された若者の政治運動の実態を、若者独自の政治とのかかわり方という観点に立ちつつ、前後の時代や地域との関連性をも視野に解明し、それによって日本近代における若者と政治との関係史を一連の流れのもとに把握することを目指した。

ところで、明治前期の自由民権運動と、第一次大戦後の学生社会運動・地域青年党運動といういわば〈二つの山〉に挟まれたその時代は、若者と政治との関係史上、長らく〈谷間〉の時代とされてきた。しかし本論文は、その時代に広く地域にまで影響を及ぼしていた若者独自の政治運動を発掘し、前後〈二つの山〉に架橋することによって、若者と政治との関係史を〈一つの山脈〉として連続的に跡づけようと試みた。

そこで本論文が着目したのは、日露戦後以降、帝国議会周辺に簇生した世代的政治集団と、その構成員たる一群の若者たちの存在である。議会政治を最善の政治形態と認めながらもその実態を一貫して批判し、理念的立場から〈真の〉議会の実現を求めた彼らを、本論文は「院外青年」（以下括弧省略）という分析枠組みによって対象化した。

彼らには、概ね次のような一般的特徴が認められる。①一八九〇（明治二三）年前後に生まれ、日露戦後に青年期・学生時代を過ごした若者を中心としている。②青年党や類似の世代的政治集団を立ち上げ、院外を主なフィールドとして政治運動を展開

する。③言論に長け、演説会・地方遊説・機関誌発行を活動の三本柱としている。④党派的には反政友会系統と政友会系統とに大別することができるが、既成政党からは一定の距離を保ち、党派をまたぐ集団間・個人間の関係が確認される。⑤第一次大戦後における社会主義的思想の台頭に対しては批判的な態度を示し、議会主義的・中道的立場を堅持する。⑥男子普通選挙実施後（昭和戦前期）に代議士となる者が多く、院外における政治運動もその頃までには終息へと向かう。以上の六点である。

この院外青年という分析枠組みの要点は、ほぼ同年齢の若者からなるという世代的なまとまりを外郭として設定し、その内部に反政友会系統と政友会系統という各党派内の異同及び両党派間の異同を併呑する包括性にある。それによって、世代的紐帯とでも表現すべき集団と集団、人と人との繋がりを掬い上げ、かつ若者独自の政治とのかかわり方という文脈へと流し込もうと考えたのである。加えて、本論文は院外青年と地域の若者との間の志向的な類似性や同志的な繋がりにも関心を払い、それが地域の動向を映す鏡でもあったということの実証に重きを置いた。その意味において、本論文は当該期における若者と政治との関係性についての一般史を叙述しようとしたものであるということもできる。

研究史の課題とそれに対応する本論文の視角を約言すれば、以下の通りである。

課題の第一は、若者と政治との関係史という観点からみて、おおよそ明治後期から大正後期、特に日露戦後から第一次大戦期にかけての時代が空白期間とされているということである。それに対して本論文は、まさにその〈谷間〉の時代に展開された院外青年運動の実態を明らかにし、その独自性を汲み取りつつ、前後〈二つの山〉――自由民権運動と学生社会運動・地域青年党運動――との関連性をも問うた。

第二は、そのこととも関連するが、日露戦後世代＝非政治的世代との理解が支配的であり、かつ若者の実態よりもその類型化（「煩悶青年」や「成功青年」など）に関心が集中しているということである。それに対して本論文は、実体としての若者及びその政治運動の実態に焦点を定め、類型的な日露戦後世代評価の相対化を図った。

第三は、院外青年は専ら既成政党の別働隊として位置づけられており、にもかかわらずその具体的な関係性や通時的実態にまでは議論が及んでいないということである。それに対して本論文は、既成政党との関係を具体的に跡づけつつも、若者独自の政治

とのかかわり方を模索した存在として院外青年とその運動を通時的に位置づけた。その際特に、①超党派的連帯への志向性や、集団の枠をまたぐ人間関係――世代的紐帯、②地域との間の相互的な影響関係、③議会政治認識の三点を重視した。

第四は、所謂「大正デモクラシー」評価と絡んで、デモクラシーとナショナリズムとが関係づけられる形式・条件や、その時代の固有性／その後の時代との連続性が論点になっているということである。それに対して本論文は、デモクラシーやナショナリズムを取り込みながら政治的主体化を遂げていった（つまり途上的存在であった）院外青年たちの運動の段階的展開に意を払うとともに、諸段階を貫く持続的志向性を抽出することで、院外青年時代と成年時代との連続／断絶という問題にも論及した。

第五は、政治運動史研究へのジェンダー史的観点の導入が立ち遅れているということである。それに対して本論文は、院外青年運動に対するジェンダー史的アプローチを構成のなかに組み入れることで、その問題に自覚的であろうとした。

つづいて具体的な方法であるが、本論文は通史的研究（第一部／第一～五章）と各論的研究（第二部／第六～八章・補章）、つまり縦横二つの時間軸において院外青年運動の歴史を捕捉しようと試みた。まず通史的研究においては、反政友会系統の①丁未倶楽部と②立憲青年党、そして③政友会系統の各集団（大日本青年党・立憲青年自由党・鉄心会）を中心的に取り上げ、三者間の横の繋がりを強調しつつも、集団的特性や史料の残存状況を考慮した三者三様のアプローチを行った。次に各論的研究においては、通史的分析によっては掬いきれない個別の問題を補完的・事例的に議論することで、本論文全体により一層の問題提起的・発展的意味合いを加えようとした。具体的に扱ったのは、①地域における若者の動向（第六章）及び②院外青年と地域との関係性（第七章）、③院外青年運動の男性性（第八章）、④院外青年の行方――運動後史（補章）という四つの問題である（以上序章「「院外青年」運動研究の視座と射程」）。

以上を踏まえて、各章の概要を以下に示す。

第一章「日露戦後における若者と政治との邂逅――「院外青年」の登場」では、自由民権期から日清戦後にかけての時代における若者と政治との関係性を前史的に跡づ

けた上で、日露戦後に院外青年運動が出発を切るまでの時代背景と、先駆的集団（丁未倶楽部・立憲青年党）の結成前後の実態を把握した。日露戦後には、それまでみられた「いまはかかわらない」という慎重な姿勢が、言論界における世代論と政治論との結合や、学生界における弁論ブームを背景に、「いまこそかかわらなければならない」という積極的な姿勢へと変化し、若者たちは政治との邂逅を遂げていった。院外青年は、そうしたなかで世代意識を昂揚させ、実際政治への働きかけを模索しはじめた新しい「政治青年」の一群であった。

第二章「世代経験としての大正政変・シーメンス事件――「院外青年」運動の出発」では、大正政変とシーメンス事件という二大事件を経験するなかで、院外青年運動が「院外青年運動」としてのまとまりを具備していく過程を、地域の若者との共闘関係にも注目しつつ跡づけた。立憲青年党と丁未倶楽部との間の政策的同調（選挙権拡張要求）や、それら反政友会系統の集団と政友会系統の集団との間で試みられた超党派の運動態勢の構築は、そのまとまりを象徴するものであった。それは院外の主要勢力＝対外硬グループからは離れた独自のデモクラシー運動であり、しかもときを同じくして発生をみていた地域青年党の萌芽的集団と彼らとの間にはすでに同志的関係が結ばれようとしていた。

第三章「第二次大隈重信内閣期における「院外青年」運動とその転換」では、党派対立の激化とナショナリズムの昂揚を受けて、院外青年運動が転換期に差し掛かるまでの軌跡を、彼らの政治的主体化の特徴や世代的紐帯の存在に留意しつつ明らかにした。橋本徹馬の対外硬的方向性への急旋回が象徴するように、この時期、院外青年たちの多くはデモクラシーに次ぐナショナリズムの内面化、すなわち段階的な主体化を遂げていった。しかしそうした最中にあっても、彼らは中国問題を契機とした超党派的な結束にみられるように、世代的運動としてのまとまりと独自性とを保持していた。

第四章「寺内正毅内閣期における「院外青年」運動の再興」では、大正政変以来の思想・運動の転換期に再興を果たしていった院外青年運動の実態を、特に第一次大戦にともなう民主的思想潮流＝「世界の大勢」に乗ってその頃参入してくる後発組の院外青年と先行者との異同に着目しながら確認した。先発組と後発組との間には、「世界の大勢」をめぐる態度（受動的／進取的）や運動方針（内閣打倒優先／普通選挙優

先）の相違もみられたが、運動の現場においては両者の融合が進行し、院外青年運動は全体として、いわば裾野を拡大する形で勢いを取り戻していった。

第五章「第一次大戦後における「院外青年」運動の収斂と拡散」では、第一次大戦後＝原敬内閣期、普通選挙（以下普選）運動へと収斂していく院外青年たちの時代認識を押さえつつ、地域青年党運動・学生社会運動との同時代的な関係性へと議論を及ぼした。その上で、運動前後の連続性という観点から大正後期におけるその拡散過程を展望した。普選運動を牽引した青年改造連盟は、学生、若年労働者、そして地域の若者が院外青年という核を取り囲むかつてない規模の世代的連合体であった。その時代には、院外青年運動・地域青年党運動・学生社会運動の三者が、鼎立ではなくいわば一個の運動群として渾然たる位相を示していたのである。ただしそこには政友会系統の院外青年は参加せず、またそれをピークとして運動は拡散過程へと移行した。しかしさらにその後の時代を概観することによって明らかになったのは、彼らの志向性や世代的紐帯の強靭な持続力であった（以上第一部・通史的研究）。

第六章「「青年」と既成政党――立憲国民党を事例として」では、院外青年という分析枠組みを一旦離れ、地域在住の若者を対象として設定した。そして彼らと既成政党との双方向的な関係性を、院外青年運動の同時代史として、地域青年党運動とのかかわりにも触れつつ読み解いた。具体的な事例として取り上げたのは、立憲国民党所属代議士によって設立された大日本青年協会とその機関誌『青年』の読者である。資金援助や生え抜きの養成など直接的な関係構築へと動いた政友会とは異なり、国民党はあくまでも「不偏不党」的立場からの政界革新を訴えていた。若者たちは、ある意味ではそれに忠実に、反既成政党を謳う青年党の結成へと動き、結果として同党を乗り越えていった。

第七章「「院外青年」と地域係争問題――橋本徹馬と愛媛県新居郡における産米検査問題を事例として」では、橋本徹馬と彼の郷里・愛媛県新居郡で起こった産米検査問題をモデルケースとして、院外青年と地域とのかかわり合いを相互的影響関係という視点から実証的に分析した。同じ時期、橋本の立憲青年党は地方遊説を通じて新たな同志を獲得するなど、地域への勢力の扶植にとりわけ積極的であったが、この事例を通じて、橋本もまた地域への介入を通じて思想内容に新生面を加えるなど、地域か

らの影響を蒙っていたこと、つまり院外青年運動と地域との間には相互的な影響関係が存在していたことが判明した。

第八章「「院外青年」運動の男性性――立憲青年党と和田（奥）むめおを事例として」では、女性メンバー＝奥むめおの参入という事例に着目し、立憲青年党内部のイデオロギー的境界線（先発組の国家主義的・対外志向型メンバー＝「国士」／後発組の民主主義的・個性重視型メンバー＝「新人」）とジェンダー的境界線（男性／女性）との言説／実態両面における関係性を検証した。それによって、「国士」と「新人」とは「婦人問題」認識においても明白に意見を違えていたが、言説から実態のレベルへと下降してみると、両者は「パラダイスの集まり」などと表現されるホモソーシャルな絆で結ばれていたことが可視化された。そしてそのなかで「婦人記者」として周縁化された奥むめおは、彼らが高唱する「世代」が実際には「彼らの世代」に過ぎないという現実を直視し、「性差（ジェンダー）」を準拠理念として掲げることで、院外青年運動を相対化し得る地点へと歩を進めていった。

補章「「院外青年」の行方――昭和戦前期における個人史的考察」では、昭和戦前期における元院外青年たちの行方を個人史的手法によって概観するとともに、同運動の歴史的意義を遡及的に考察した。対象としたのは、代議士となった鈴木正吾（少数党所属）、西岡竹次郎・肥田琢司（大政党所属）、そして代議士とはならなかった橋本徹馬の四名であり、院外青年時代との連続／断絶という問題、あるいは彼らの間の世代的紐帯の行方についても論じた。四者は院外青年時代と比べれば、〈連続型〉の鈴木・肥田、〈断絶型〉の西岡、〈断絶／連続型〉の橋本と分類することも可能ではあったが、西岡と肥田の同志的関係、鈴木と橋本の生涯を通じた親交、そして肥田による橋本の後方支援といったように、その間には思想的立場や党派的異同のみによっては説明不可能な世代的紐帯が依然として認められた（以上第二部・各論的研究）。

終章「「院外青年」運動研究の成果と課題」では、序章で提起した研究視角を念頭に置きつつ、院外青年運動の①通時的・段階的実態、②前後の時代における運動及び地域との関連性、③ジェンダー史的性格、④若者独自の政治とのかかわり方の諸相という四つの角度から本論文の成果を総括した。以下その要旨を掲げる。

第一に、通時的・段階的実態については、院外青年運動には登場（政治との邂逅）→出発（「院外青年運動」としてのまとまり）→転換（段階的主体化の完了）→再興（後発組の参入）→収斂（普選運動）→拡散という六つの段階が存在し、さらにその諸段階を、心情倫理的あるいは議会主義的・中道的な思考様式や汎思想的・超党派的な連帯といった持続的志向性が貫いていたことが明らかとなった。しかも彼らの行方が教えていたのは、それらが運動後をも貫いていたということ、つまり二重の意味における持続性を備えていたということであった。院外青年運動の拡散とは、その意味において、従来評価されてきたような「ふくろ小路」への嵌まり込みであったのではなく、集団型の運動から世代的紐帯が交錯するネットワーク型の運動への志向性を引き継いだ転換であったと評価し得るものであり、それは地域青年党運動への志向性の伝播という意味も含めて、「放射」的発展であったと表現すべきであると考える。

また院外青年運動とは、既成政党の別働隊でもなければ現状追随型の運動でもなく、横からみれば世代的紐帯で結ばれた集団と集団、個人と個人とが思想や党派の境界を越えて行き来し、縦からみれば独自の持続的志向性によって貫かれたすぐれて世代的・理念的な運動であったということもできる。さらにそうした特性は運動参加者の成人後をも規定していたということを勘案するならば、その歴史的意義は運動期間を超えた先、すなわち彼らが議会政治に対する挑戦者から担い手へと成長を遂げていく大正後期～昭和戦前期、そして議会政治の再生を指導的立場において推進し、やがて所謂「保守本流」の流れを形成していくという戦後の一連の過程にまで及ぶ。

第二に、前後の時代における運動及び地域との関連性ということでいえば、先立つ自由民権期の青年党は、各地に散在する同志的グループの遠心的ネットワークに近く、世代意識も稀薄であった。それに対して院外青年集団は、日々顔を突き合わせる少数精鋭型の結社に拠り、その内部で培われた親密な人間関係を、強固な世代意識を媒介として他の集団と連鎖的に接続させることで、総体としてゆるやかな政治勢力を形成していた。

しかも院外青年運動は、中央を表舞台としながら、民権運動のような地域的広がりをも追究していた。彼らは当初から地域に対して働きかけを行い、ときには地域から学び取り、また地域の側においてもそれに呼応する動きが生じていた。つまり院外青

年運動と地域との間にはいわば映し鏡のような関係が存在していたのであり、地域青年党運動もそうした関係のなかで発生・展開をみたと位置づけ直されるべきであろう。

さらに第一次大戦後には、院外青年運動の内部において先発組と後発組との一体化が加速し、普選運動という大きなうねりが形づくられていったわけであるが、その後発組の主力をなしていた学生層は、学生社会運動に参加していく学生層と同一の母胎＝弁論部から、しかも同時並行的に輩出されていた。換言すれば、院外青年運動の再生産過程と学生社会運動の発生過程とは軌道を同じくしていたのである。

総合すれば、比較的早期から絡み合っていた院外青年運動と地域青年党運動との軌跡に、第一次大戦後に至って学生社会運動が合流することで、三者が鼎立ではなく全体として一つの運動群を形づくるような、短期間とはいえ濃密な数年間が存在したのである。そのことは、若者と政治との関係史をシームレスに捉える上で重要な示唆を含んでいると考える。

第三に、院外青年運動のジェンダー史的性格についてであるが、立憲青年党の事例から明らかとなった彼らのホモソーシャリティは、院外青年運動を特徴づける彼らの世代的紐帯と密接不可分の関係にあったとみることができる。見方をかえれば、院外青年運動への後発組メンバー（「新人」）の参入は同運動の段階を画する一つのポイントであったわけであるが、ジェンダー史の観点を用いればそれを連続的に把握することが可能になるというわけである。要するに、彼らのホモソーシャルな欲望は、院外青年運動の諸段階を貫く持続的な志向性の一つであったのであり、それは彼らの行方にまで視線を投げかけるならば、「政治」の世代を継いだ男性化にも一役買ったと考えることができるであろう。

第四に、若者独自の政治とのかかわり方という観点から院外青年運動を再点検してみると、例えば橋本徹馬などがその代表であるが、彼らには政治と道徳・宗教との合致を志向する政治＝道徳・宗教主義とでもいうべき傾向性が認められた。そうした脱世俗的な政治観は、一見アナクロチックに映りもするが、実際には内面的充実欲求を横溢させていた日露戦後の若者たちの志向性に投じており、「文学青年」や「宗教青年」、さらには奥むめおのような女性をも魅了していった。その事実は、院外青年という分析枠組みによって把握される存在形態が、従来専ら強調されてきた「文学青

年」や「煩悶青年」などといったような日露戦後の新類型と全くかかわりのない旧来型の「政治青年」であったのではなく、それらと領域を接し、浸食すらするような新しいタイプの「政治青年」であったということを教えている。

しかしそうした政治観をもつ以上、彼らの政治姿勢は勢い理念的・抽象的に流れざるを得ず、それは現実的には政策論議の軽視という形で運動に反映していた。ただしより重要なことは、そのことがかえって彼らの人間関係を政策（思想・党派）的異同から自由にしたという側面である。個々の集団を集団たらしめていたのは、思想的統一性というよりは往々にして世代的な同属意識や性向的な共鳴関係であった。本論文が世代的紐帯という言葉で表現したそうした人間関係は、彼らの言葉を借りて繰り返すならば、政策的相違を「全く同じいカラア」へと中和してしまう世代的な「善意了解」を縦糸に、「思想的にはお互いに異っていたが、よくウマが合うというか、仲が良かった」といった類の性向的共鳴を横糸に、個人間、集団間、さらには中央―地域間へと連鎖的・境界横断的に張り巡らされることで、全体として院外青年運動という独特の綾を織りなしたのである。

以上のように、本論文は、思想的・党派的傾向の別を大前提として、そこから集団が誕生し、運動が展開されていくという通例の政治運動史的想定を括弧に入れ、それらの別を併呑する包括的な分析枠組みを駆使することにより、〈谷間〉の時代に埋もれ、不可視化されてきた院外青年運動の――若者の歴史そのものの――独自性に光を当てた。そして成人後をも見通す長期的な分析の幅をもって、若き彼らの歴史が、その間の持続的特徴を保持したまま「大人の歴史」へと溶け込み、各人の生涯を規定しつづけていたということを明らかにした。こうした研究視角は、本論文が中心的に扱った日露戦後から第一次大戦期にかけてという時代に限らず、〈二つの山〉を含むその前後の時代、あるいは地域、さらには現代における若者と政治とのかかわり方を考察する上においても、新たな発見を促すだけの射程を備えていると考える。

以上